

除する事也、むろのやしまとは、竈戸をいふと古髓腦に書り、除夜に民の竈戸をさらひて、こんずる年のうちの事の吉凶みな見ゆといへり、火を日々にあて、きえ、きえぬを見てしるなどもまをすめり、ことこびとは、みんと思事を云也、それに我身のなりはてんほどをもしろと讀也、祇園修行日記云、貞和六年十二月二十九日、今日晦日也、始煤掃、宣胤卿記云、永正元年十二月十九日、朝陰、屬晴、比屋煤掃、亂以前朔日、式日也、嚴嶋道芝記年中行云、十二月晦日、御煤掃、上番の社司衣冠引繕ひ、國文代下番等立まじはり、御殿を清め奉る也、また草根集云、歲暮家々にはらひつくすをあやにくに空はす、けておつる雪哉、とよめるも、除日なるべし、是も亦もろこしにあり、玉燭寶典二卷十云、歲暮今世多解除、擲去破弊器物、名爲送窮、太平御覽四百七云、錄異傳曰、昔廬陵邑子甌明者、從客賈道經彭澤湖、每輒以舟中所有多少投湖中云、以爲禮、積數年、後過見湖中、有大道、有數吏乘車來候云、是青洪君、以君前後有禮、故要君、必有重送、君者、皆勿收、獨求如願、及去、果以縑帛送、明辭之、乃求如願、神呼如願、使隨去、如願者、青洪婢也、明將如願歸、所欲輒得之、數年大成、富人、歲朝鷄一鳴、呼如願、如願不起、明大怒、欲捶之、如願乃走、明逐之、於糞上、糞上有昨日故歲掃除聚薪、明乃以杖捶使出、久無出者、因曰、汝但使我富、不復捶汝、今世人、歲朝鷄鳴時、轉往捶糞云、使人富也、これ歲朝に昨日故歲掃除とあり、除日に掃除したる事、明らか也、夢梁錄云、十二月盡、俗云、月窮、歲盡之日、謂之除夜、士庶家、不論大小、家俱洒掃、門閭、去塵穢、淨庭戶、僧明本の中峯廣錄、鴈蕩除夜頌云、茅屋三間冷似水、灰頭土面十餘僧、掃除自己閑、枝葉不打諸方爛、葛藤就手揭、開新歲曆、和光吹滅舊年燈、頂門別具摩醯眼、越死超生似不曾、楊循吉除夜雜詠云、除塵舊室攻、遂安縣志云、除夜掃宅會、南野堂筆記云、梅里薛鹵齋廷文、五十未娶、有除夕詩云、獨送窮愁獨掃塵、一回除夕一傷神、來朝記取年多少、不敢分明說與人、みな除日の煤拂なり、

〔古今要覽稿時令〕す、はらひ煤拂す、はらひの事は、中昔より慥に所見ありといへども、神代